

ひとりごと

「シン電車男」

つい3年程前は高校の学校現場でクラス担任や部活動顧問として、生徒の夢に寄り添い、将来愛される人間になるためには今何をしなければならないのかと大それたことを生徒に問いかけながら、『自分は教師でありスーパーマンではない』などと勘違い甚だしい充実した毎日を過ごしていました。

今思えばその頃の私は、目の前の限られた狭い世界を全うしていただけだったのだと痛切に感じています。

一昨年度からは、児童生徒と直接関わる機会はなくなりましたが、教育委員会での指導主事という立場で、学校現場の先生方と教師の指導力向上のための研修などを通じて、生徒への声掛けやアプローチについて、工夫を凝らした教材教具の共有など、幅広くより良い教育法について考え語り合いました。

昨年度は、部署異動により事業等を手掛ける機会をいただき、未来を切り拓く人材を育成するために教育はどうあるべきかなど真剣に考え、多くのことを学ぶ1年となりました。

私にとってこの2年間は、教育行政に携わり戸惑うことばかりでした。そして今年度は、文部科学省にて行政研修生として過ごす日々を送らせてもらっています。上京して単身赴任生活。通勤及び週末の移動の際には必ず電車を利用しています。

地元では車での移動が中心の生活を送っていた私にとっては、この一年で一生分の電車を利用しているのではと感じています。

そんな今現在私の生活の一部となっている電車内での何気ない日常には、素敵な出来事がたくさん転がっています。

その1:車両内で老夫婦を見かけた小学生が、トントンと合図で呼びかけて「ここどうぞ」と声を掛ける。

笑顔で座る老夫婦。笑顔で座席を譲る父と子。

自ら席を譲った息子に対し親指を立て褒める父親と、嬉しそうな息子。

その光景を見ていた私は思わず、「感心だね」と一言添えて小学生とハイタッチ。

あのときの照れながらも嬉しそうにしていた小学生の顔は忘れられません。

その2:6名の外国籍のテブリンピックの選手団（国旗のついたジャージを着用し、当時、テブリンピック期間中だったため勝手な私の憶測ですが）が乗車。

静けさの中で飛び交う手話。

目の前の光景が、わたしにとっては一気に非日常な空間となりました。そんな中、黙る私には裏腹に果敢にコミュニケーションをとる若者。

どうやら選手団の彼らは便利な移動方法を模索中だったようで、その若者は携帯端末でJRのロゴ見せ、手にしていた路線図を指でたどりながら乗り換えについて丁寧に教えてあげていました。

無事にやり取りを終え、笑顔で感謝を伝え去っていく選手団。どちらも気持ちがほっこりするような出来事でした。ごく普通の何気ない気配りなのでしょうが、これから共生社会を生きる上の非認知能力の育成の必要性を改めて強く感じた瞬間でした。困った人を見かけ、助けが必要であればさっと行動する。ごく普通の当たり前のことが容易にできない、相手を察しながら気を遣う、『気を遣う』ことに気を遣わなければならぬ事柄が日々ある今日この頃。世知辛いなど感じつつ、東京での生活は、心を磨き感性を鍛える機会に満ち溢れているように感じています。こちらでの生活も残すところあと2か月。

充実したものになるかどうかは、自身の心の持ち方ひとつで変わるものでしょう。

電車生活にうんざりするのではなく楽しみを持ち、感じるセンターを研ぎ澄ましたシン（心）電車男として過ごしたいと思います。

シン電車男として過ごすこの2か月の経験が、きっとこれから自身の教師としての佇まいにつながるものと信じながら…。

